

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—試行錯誤—

No.28



ナムユンの補助食供給センター，食事を待つカンボジア難民の母子

ナムユン補助食供給プロジェクト

大野直樹

車のエンジン音が、窓の下から響いて来る。陽が登ってまだ間もない静寂な林の空気を揺さぶりながら、タイ人の仲買人が車で肉や野菜を届けに来た。それを栄養士が注文書と照合する。午前7時、4輪駆動車に乗り込む。

デッド・ウドムの町から南に伸びている1本道を約45分、遠くもやの中に一連の山が見えてくる。タイ・カンボジア国境である。ナムユンの村に入り、タイ軍TF-80の許可をもらう。M16(自動機関銃)で武装した兵隊もわれわれの車に乗り込み、砂と岩の多い山道を6キロ(約30分間)登ると、小高い山と林に囲まれた平地に出る。ここが補助食供給センタ

ー(Supplementary Feeding Center. 以下SFC)である。

100人分の食事を作る大きな鍋に、お湯をわかして待っていたクメール(カンボジア)人達は、4輪駆動トラックの荷台から肉や野菜を降し調理にかかる。

午前9時半、子供をつれた母親達がSFCの周囲に集まってくる。栄養士の指導により、彼らは手を洗い、つめを切って給食の時間を待つ。

午前10時、給食開始。

この補助食供給プロジェクトは、'82年12月WFP

/UNBROが企画し、ナムユン難民村で妊産婦と子供達を対象とした健康調査が行われ、その結果に基づき始まる事になった。

'82年1月の中旬頃、タイ最高指命部が推薦した地点で、クメール人によるJVC補助食供給センター(SFC)の建築が始まった。またその作業と平行しタイの村からSFCまで4輪駆動トラックが登行する為の道を造る工事も行われた。その工事は、アスファルトで平らに舗装するのではなく、木を切り倒しハンマーで岩を砕き、その残骸で道の凹部を埋めるといった原始的な作業であった。

これらの工事を行った難民達が住む村は、タイ国内にあり、国境まで約8キロの地点である。彼らはWFPより、米、缶づめ、干魚、油等の配給を受けている。また中には、トウモロコシやキュウリ等を栽培している家族もあるが、数に限りがあり、一部の者達だけしかそれを食する事ができない。彼らの住む家は、竹と丸太の柱でできている粗末な小屋のため、雨期には雨漏とマラリヤに悩まされる。そんな難民村に住む彼らの中で、SFCにきて補助食を得ることが許されている者達は、特にバランスのとれた食物を必要とする妊産婦、3才以下の子供達、医師が病気または栄養失調と診断した者達、それに家

族がいない老人や子供達である。(対象約350名)

補助食は、チキン、ポーク、ビーフ等のスープと御飯、または、ヌードル、スープ等で、1才以下の子供達にはバナナをつぶしたり、米を粉状にして作った離乳食等である。

このSFCにくる彼らは、山道を50分も歩きやってくる。1日1食の配給食を求めて。

今は雨期、彼らはきっと雨の中を歩きながら、こつこつと歩くであろう、「いったい、いつになったら自分達が自由にらせる日がくるのだろう。」

タイ、ラオス、カンボジアでは、1年のほぼ半分が乾期で、その間、ほとんど雨は降らない。農民達にとって雨は、命である。またベトナム軍との大きな摩擦も止む。しかし、同じ雨が、子供を抱き補助食を求めて山道を歩いてくる難民達を苦しめる。

そんな彼らにとって、雨は憎いであろう。しかし、もっと憎いものは、彼らをそんな状態に追い込んだ戦争である。

おおの なおき：'80年11月よりJVCに参加。日本語学校の教師としてウボンキャンプに入り、'82年7月には石けん学校の開設に奔走。昨年ラオス人女性と結婚。30歳。

ナムユンの母親と子供たち

峰野美智子



重度の栄養失調だったVちゃんもずっと元気になった

「チョムリアップスー」(こんにちは)母親に抱れた子供も、手をあわせてあいさつする。

日中の強い日差しをさけるためであろうか、10時半頃から始まる給食に、朝早くから人々が来ている。

子供たちは、片道約1時間もの山道を歩いて来たのに疲れもみせず、はにかみながらも笑顔で待っている。

クメール人ワーカーに、今日の料理の指示を出し終える頃になると、青空学級のはじまりだ。このプロジェクトは、単に成長期に必要なバランスのとれた食事を与えるだけではなく、基本的な栄養や保健の教育、家庭での衛生的な食事の摂り方の指導など、彼らの生活の改善を目指している。現在、遠距離で

あるために全員出席は望めないが、栄養士の指導のもとに行なわれる歯みがきや手を洗うことの講習を彼らは真剣な表情で聞いている。

子供たちは改めて自分の手を見、つめがのびていと早速、カルカチョ（つめ切り）、リエンダイ（手洗い）。母親も一緒に、輝くような手になった子供たちは、ほこらしそうに手をひらめかせながら、SFCの入口の所に集まる。ここで1ヶ月に1回、身長、体重を計るのだが、中には母親の手を離れたがらず泣き出す場面もあり、こういった時は、お兄さん、お姉さんが見本を示したりして大奮闘する。

いよいよ給食開始。1才、2才の子らも行儀よく列をつくりボールを受け取ると、両手にささげ持つようにして、しずしずとテーブルまで運んでいく。

まだ、あどけなさの残った妊婦さんは、時々出される食後のデザートが大好物だ。7ヶ月の赤ちゃんを抱いた母親は、離乳食と自分の食事のあいだでスプーンを動かすのに忙しい。

米と魚の缶詰めはWFP/UNBRO（World Food Program/United Nation Border Relief Operation）より支給される。それ以外の野菜、肉は、難民1人あたり1食3パーツ（約30円）の予算であるが、材料を変え、料理法を変える。「おいしい。おかわりありますか？」と言われるときは、やはり嬉しい。

2才で6kgという栄養失調第3期で病院に運ばれてきたVちゃんも、1ヶ月たった今、7kgとなり

（第2期）笑顔をみせるようになった。SFCで座って食事を取れるようにもなってきた。

出口では、みかんやバナナが配られ、母親は赤ちゃんをつつんでいるクロマー（布切れ）に大切にしまふ。母親の巻きスカートの端をしっかりとにぎりしめ、おずおずと手をさし出す子もいる。昼の日射しの中を、彼らはまた1時間かけて山を登っていく。

現在、この難民村は新しい場所に移動をしている。

それに伴い、難民村より5～10分程の所に新しいSFCが、8月にはできあがる予定だ。

ボランティア達は今よりさらに30分、山道を登る事になるが、喜びは大きい。

村の近くに行くことによって、対象者全員、特に今まで体が弱くて来れなかった人々にまで、こまかくめんどろをみる事ができるからだ。

夜のミーティングでは、今後の計画作りが話し合われる。「離乳食指導をしよう」「スライドを使おう」「めん類、パンも作ろう」とアイデアを語り合うボランティアたちの話はずむ。

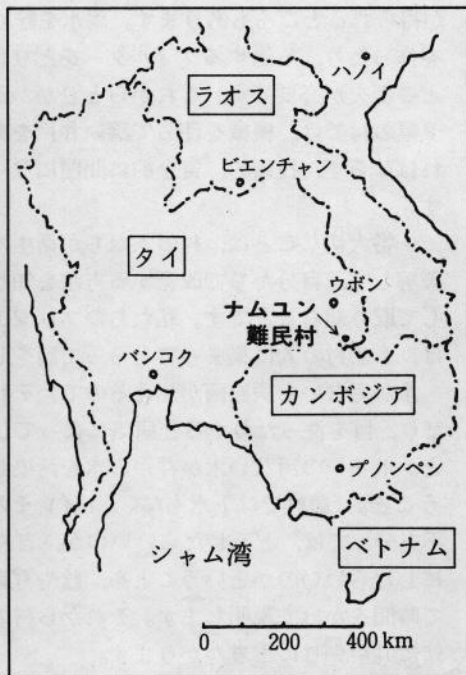
栄養失調第3期（身長対体重の比：平均を100%とした場合、85%以下。重度の栄養失調の場合によっては死ぬこともある。）

栄養失調第2期（90%～86%、栄養不良）

みねの みちこ：東京リエゾン・オフィス時代から会計などを担当。今年5月から補助食供給プロジェクトの事務を担当、7月に帰国。



また山道を登って、難民村へ帰っていく



タイ農村の給水プロジェクト

“村人の協力が肝心です”

JVC 給水チームの、タイ人技術者スラポンさんに聞く。(文責、編集部)

タイでは、水道のあるところは限られています。

農村では、雨水をカメに貯めたり、川や池の水、井戸の水を使っていますが、たいいていの場合、遠くまで汲みに行かなければなりません。

その水も、塩分や鉄分が強すぎたり、病原菌が混ったにごり水であることが多いのです。これがアメーバ赤痢とか眼の病気の原因になっています。

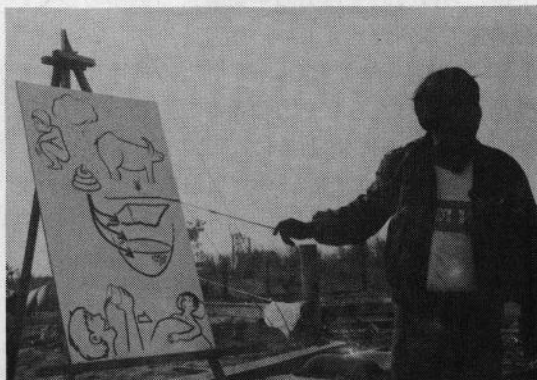
私たちは昨年3月から、カンボジア国境に近い東北タイの農村で、水の調査を行い、その結果にもとづいて、42の村に平均3本づつ計126本の井戸と、セメントの貯水タンクを作る2ケ年の計画を立てました。

9月から本格的にとりかかり、これまでに13ヶ村で41本の井戸を掘りました。このプロジェクトの、資材やその他の経費はすべて日本のみなさんからの募金によって支えられているのです。

きれいな水を確保するためには、ただ井戸を掘ればよいというわけではありません。今までプリラム県でやってきたように、手で掘る浅井戸でもセメントリングを入れ、汚ない水がしみ込まないようにセメントで固めることで、充分きれいな水が得られるところもあります。雨水を貯める水槽を作ったり、ろ過するフィルターをとり付けるなどの工夫が必要です。これからとりかかるタブラヤ県の村では、機械を使って深い井戸を掘らなければならない、技術的、資金的に問題になっています。

一番大切なことは、村の人たちが衛生の問題を理解して、自分たちで改善する方法を知り、協力して取り組むことです。私たちのプロジェクトでは、まず村の人に集まってもらって話をします。

水が汚ないと病原菌が増えるので、それを飲んだり、目を洗ったりすると病気になってしまうこと。トイレの汚ない水が井戸の水を汚染してしまうこと。(農村では下水もなく、トイレそのものも不十分)では、どうしたらいいのか、どんな井戸にしたらいいのかということを、絵や写真を使って時間をかけて説明します。それから村の人と一緒に井戸掘りにとりかかります。



村人を集めて公衆衛生の説明をするスラポンさん

しかし私たちは、2本か3本の井戸をつくれば移動してしまうので、よそ者としてできることに限りがあります。村のことは、村の人々の力で良くしていかなければなりません。

実際、すでにいくつもの村で、村人が集まって古い井戸を改善したり、新しい井戸を掘ろうという動きが出てきています。

けれど新しい井戸を作るためには、少なくとも10万円ほどのお金がかかるのです。

東北タイは貧しい農村地帯です。かんばつや洪水にみまわれ、米の値段は安く、借金をかかえている人も少なくありません。プリラム県では、1戸あたりの年収が3,000 バーツ(約3万円)という統計があるほどです。

バドンキャット・スラポン

1946年バンコク生れ

高校卒業後、'67年8月から7ヶ月間、日本で自動車整備技術研修。米軍、フォード自動車、オリエンタル・ホテル、などに勤務の後、'80年5月から4ヶ月間 UNHCR の給水エンジニアとして働く。'81年8月以来 JVC に参加。洪水教授、チェンコン、パナニコム、カオイダンを経て、'82年3月より給水チームの主力メンバーとなる。

▶スラポンさんは、給水プロジェクトの資金援助団体であるモラロジー国際救援運動推進委員会の招きで来日、各地で報告、交流の場を持つ予定。

「困難になってきた第三国定住」

「定住(resettlement)とは、難民が一時避難国から恒久的な居住地へ移り住むことである。この解決法は難民が文化的に疎外されてしまうため、望ましくないと考えられている。しかしベトナムのポートピープルのような例では、第三国定住が唯一の道である。

UNHCR本部の定住部長のK・フェルドマン氏は最近の定住問題を次のように語っている。

東南アジア諸国に一時滞在中のポートピーブルの数、約45,000人('83年5月現在)は変わらないが、インドシナ難民の定住受入れは除々に減っている。ラオスの山岳民族難民はごく少数しか受け入れられていない。また海上での救助件数は、今年に入って毎月ゼロか、1、2例にとどまっている。これは航行中の船舶が、難民を避けてやり過しているためと結論せざるを得ない。UNHCRは各国の船舶協会に難民の救助を呼びかけている。また救助した難民の港への上陸手続きの手引き書を作り、配布している。(近く日本語版も出来上がる。)

インドシナ難民の場合、大量の難民が第三国へ定住したが、国際社会はよくこれに対応した。このことはこれに携った人々にとって誇りとなっている。

しかし世界的な経済不況が、これに歯止めをかけている。行政、法律上の制約が厳しくなりつつある。しかしそのために難民が犠牲とならないようにするのが私たちの仕事だ。

第三国定住は、他にもウガンダのアジア人難民、南米の難民の例がある。いずれの場合も各国が共同で荷を負った。個別のケースでは、難民が一時避難国で法的または政治的な理由で獄につながれているような場合もあり、そのような時は第三国定住が文字通り、唯一の保護の方法となり得る。

第三国定住は離散した家族を一緒にすることでもあり、長期的な治療を要する障害を持った難民のために求められることもある。

難民の定住の仕事は、移動、受入れから身元引受け、社会への適応自立のための援助まで、各段階で広範な人々の力を巻き込むものである。その国がどれだけの難民を受け入れられるかは、いかに難民を無理なく調和させることが出来るかにかかっている。これに協力してくれる民間団体の貢献はかえがたいものである。(編集部訳)

こ せ 御所 ベトナム難民日本語学校 レポート

大貫玲子

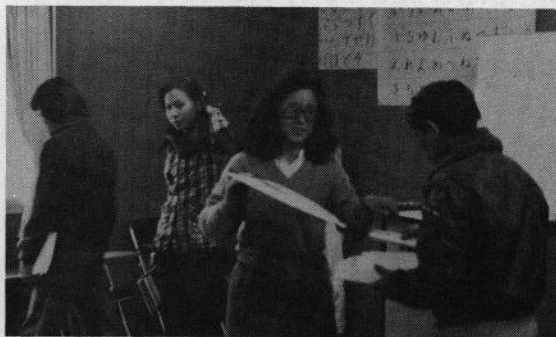
5月9日、第2期日本語学校の授業を開始した。生徒数は、大人3クラス48名(男子36名、女子12名)内16名は第1期生で、直接定住を希望するもの、および出産等の理由により、国際救援センターへの入所がおくれているもの等である。小学生2名は、今回御所市立葛小学校で教育を受けることが出来るようになった。また幼児8名は第1期と同様、教会のボランティアの世話になっている。

新しい生徒32名(幼児を含めて37名)は第1期修了直後の4月26日より5月初旬にかけて9つのキャンプより入所して来た。入所順に面接と日本語能力の調査とを行った。その結果、ひらがな・かたかなの読み書きが出来るものは12名、うち2~3名はやさしい日本語を話すことも出来たが過半数は第1期生と同じく、読み書きも話すことも全くできなかった。今期は家族づれは少なくほとんどが単身者である。日本語の授業は第1期と同様、月曜日から金曜日まで8時45分から12時、1時10分から3時までである。また3時10分から1時間はクラブ活動で月曜日は音楽、水曜日はスポーツが必修、その他の日はソロバン、生花、手芸、園芸、習字などそれぞれ選択としている。土曜日は工場、会社の見学、スライド映写会、講演会、遠足等教育オリエンテーションを行っている。

なお今期は西大和教会所属のシスターが日本語教育に参加している。シスターは8月以降定住難民のアフターケアを担当することになっている。

5月の行事

8日入所式、9日授業開始、14日吉野山遠足、21日スライド映写会(日本の地理)、大掃除、27日誕生会、29日カルタ会、奈良県定住対策委員との懇談会



御所の日本語学校、中央は指導にあたる伊藤先生

パナニコムから大和へ

谷沢一江

タイの首都バンコクより東南にバスで2時間のところにあるパナニコム難民キャンプは、第3国定住希望者のために手続きをふむプロセッシングセンターと、具体的な出発を待つためのトランジットセンターに分かれている。

1980年始め頃までの混乱した緊急状態とも、今なお戦闘の危険におびえる国境の村とも違い、パナニコムで落着いた日々の中に暮らす難民は、一見まわりのタイよりも物質的に恵まれ気楽に生きているように見えることもある。

しかし彼らにとって大きな問題は、自分達で働き生きてゆく自由のない事である。UNHCRや国際機関、民間救援団体が入り最低限の生活は保障されているが、人間としての生活（たとえ貧しくとも）を考える時、彼らが一番望む事は早くキャンプを出て自分の力で生きる事である。

カオイダンなどの難民キャンプ（ホールディングキャンプ）の難民は、第三国定住希望の書類を主な受入国（アメリカ、フランス、カナダ、オーストラリア、日本など）の大使館宛に送る。受入れの可能性のある者はパナニコムに移り、インタビューを受けて定住許可を待つ。（詳しくはT/E 24号参照）日本の場合このインタビューから定住許可通知までの期間が他の国に比べて長いことが、難民たちに不安な日々を送らせることになる。多くの人は耐えてじっと待ち続けるが、途中で他の国への可能性をみつけて変更する人が出る事もある。時には長いこと待って断わりの通知を受けるという悲しい場合もある。

JVC日本語学校は、日本の定住調査団のインタビューを終え内定者として正式通知を待つ人々の名簿により、クラスを編成して3ヶ月を1期とする、日本語教育と日本紹介を行っている。

そのパナニコムで、私はタイでの2年余りの活動の後半の1年を、日本定住希望の人達と喜びや悲しみを共にして過ごし、5月末に帰国した。

この1年間に接した日本語学校の生徒達の中には、すでに日本で新しい生活を始めている人達あり、大和定住センターで日本語学習中の人や職を探してい



みんな日本へ行ける日を心待ちにして、勉強に励んでいる

る人達もある。まだパナニコムで日本行を待っている人達、そして日本定住を望みながら他の国へ行った人達もある。その何人かを紹介したい。（敬称を略す）

オムセチカ夫妻は、'82年6月来日の予定が、出産のため9月になった。子供の名前を日本名にしたいと“誠”と付けた。再会してその理由を聞いたところ、子供が大きくなって学校に行く時、カンボジアの名より良いと思ったと言う。彼は今、成田のビューホテルに勤務し、一生懸命働いている。

ベンチャンリッツは人なつこい20才のカンボジアの青年で、よくパナニコムの図書室で話したり手伝ったりしてくれた。少ない小使いを節約してJVCメンバー全員に名前入りの竹のプレスレットをプレゼントしてくれた。彼は今、昼間は働き、夜は夜間中学に通い勉強している。

プロムチャンポーは、JVCのカオイダン自動車整備学校の1期生で勉強家だった。初め兄と2人で申請し、その後兄嫁と子供を待つため長くパナニコムにいた。その間何度か希望を失いそうになったががんばり、去年12月に日本に来た。持ち前の熱心さを発揮して大宮の工場で同僚に可愛がられて働いている。

チョン・シソワン、ソティの兄弟は、20歳と10歳である。両親や兄弟をボルボット時代に亡くし家族

の中で2人だけ生き残った。シソワンは独立心が強くキャンプを出て定住する事を望んでいた。日本には従兄がいるので申請し、1月に大和センターに入った。人一倍、与えられる生活からぬけ自力で生きたいと思っている彼だが、弟が小児ぜんそくで入院をくり返す事もある、まだ大和センターで彼ら兄弟の状況に合った仕事を探している。

2月に着いたダラウオン・フンラキは中国系ラオス人で奥さんと3人の子供がある。人柄も素晴らしく英語力も優れ、JVCのパナニコンの日本語学校でも日本紹介のフィルムの説明を英語からラオス語に訳す作業をボランティアに手伝ってくれたり、皆の信頼もあってリーダー的存在だった。大和センターでもその力は認められ、6月18日の修了式には答辞を立派に読んでいた。

5月6日にタイから来た人達も大和センターで勉強中であり、今までにパナニコン日本語学校生徒で定住したのは217名である。

日本での再会を喜べる人達とは別に、他の国へ行った人達も忘れられない。

チョン・サムニャンは、サケオ JMT (日本政府派遣医療班) のヘルパー (助手) をしていた。日本人看護婦がスポンサーとなって彼を日本に迎えると約束して帰り、彼は1年余りをパナニコンで待つ不安な日々を送った。最終的にはスポンサーがおりたとのことで、彼の日本定住の道は閉ざされてしまった。カナダへ行った彼からは、まだ日本へ行きたい、と書いた手紙が来る。

キムルーンはやはり JMT サケオのヘルパーで申請した。許可もおりて去年10月に出発の予定だった。ICM (Intergovernmental Committee for Migration) の健康診断で先天性心臓疾患が発見され、彼と彼の家族には日本入国にストップがかかった。彼は JMT で日本人医師を知り、日本の医学に信頼をおき日本で手術したいと願った。彼と同じ出発グループで日本に着いたソーエンは、日本で心臓病がわかり、1月には手術を受けて今は元気に働いている。運命のいたずらの恐ろしさを感じる。キムルーンには良

国内に滞在する難民数

7月5日現在

(アジア福祉教育財団資料)

一時滞在難民	1,712名
(含む大村レセプション・センター)	
大和定住促進センター	89名
姫路	100名
国際救援センター	223名
定住者数	2,475名
パナニコンで日本定住を待つ人々	約300人

き返事は来ず、日本でのスポンサーも見つからず、彼は今もパナニコンで、国境に帰されるのではとの不安な日々を送っている。他の国への可能性もわからない。

彼は結局日本政府から定住受入れを断わられてしまった。命にかかわる病気であるだけに、難民キャンプに留め置かれるままではなく、なんとか彼のためによい方法がないものかと思われてならない。奥さんと子供1人いる彼は、まだ28歳である。

パナニコンから大和へ、そして日本人社会への道を歩む難民の問題は、センターを出てからが大きい。言葉、生活習慣、考え方の違いによる誤解など、彼らが社会にとけ込むには彼ら自身の努力とまわりの人々の理解協力なしには出来ない。パナニコンでは元気におしゃべりだった子が、はい、いいえしか言わない小学3年生になっていたり、定住後1年余りになるのにほとんど日本語を使わないお母さんなどを、帰国してこの数週間にみて、今後どんな風に彼らの手伝いが出来るかをみんなで考えていきたいと思う。

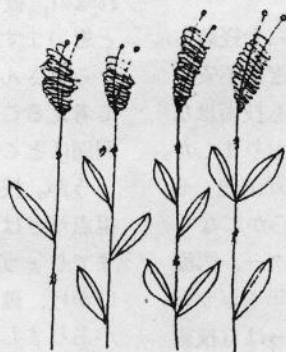
やざわ かずえ: '80年7月からJVCに参加。'81年5月からウボン・コーディネーターを務め、バンコク事務所人事担当を経て、'82年6月からパナニコン日本語学校のコーディネーター、となり、日本語のクラスも受け持つ。

JVCプロジェクト

1983年6月18日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カオイダン (カンボジア難民 キャンプ)	自動車整備学校 5月23日, 606名卒業。6月1日, 553名入学。 在校生834名。6月1日より, 生徒や先生の子供 たち(3才から5才まで。最高60名)を対象に託 児所(Day-care Center)を開設した。	U N H C R ロータリークラブ 千葉県	嶋 紀晶※, トンディ 清水 洋子, 松本 一仁 ソムエック, 下平 良男
タイ・カンボジア 国境	医療プロジェクト(X線チーム) 移動レントゲン車による, 難民村・タイ被災村, 巡回診療。各キャンプはほぼ安定しており, 緊急 医療から継続的医療活動に移行し, 撮影回数も増 加した。 また, 眼科患者の診療も増加した。	日本青年会議所 WFP/UNBRO 西本願寺 一般寄付	金子 一弘※, 武田 長久 百村 清志, 米田 省三 スラ, プロチョン
	ナムユン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の妊産婦, 乳幼児を対象とした補助食供給。 雨季に入り, 水の問題は解決したが, 一方では小 川の増水に対処するために, 架橋工事が始まった。 毎食前, 栄養・衛生指導として, 塩を使つての歯 みがき指導, 爪切り及び手洗いの指導を行った。 1日平均の受給者数 61名, (18.72%)	WFP/UNBRO	大野 直樹※, 峰野美智子 チャイサック, 近藤美佐子 ジュタワン イサラサック トンチャイ
タイ農村	給水プロジェクト 東北農村での井戸掘り, 貯水タンクづくり 村人へのインタビュー及び水質試験, 実地調査を 念入りに行った。今回のタブラヤ地域は, プリラ ム県とは異なり, 浅井戸だけでは安全な水を供給 することはできないと判断。現在のところ, ①浅 井戸, ②深井戸, ③フィルターで浄化, ④池の改 善を検討中であるが, 特に②と③の組合せによつ て安全な水が確保できると考えられる。	モラロジー研究所 NTVチャリティー 委員会	木村 信夫※, スラボン 諸見里 勝
タケオ (カンボジア国内)	井戸掘り 地域の診療所での井戸掘り。4月までに17本。	O X F A M モラロジー研究所	簗田 健一※
バナニコム (第三国定住待ち の人々の一時収容 施設)	日本語学校 第7期生96名は5月6日終了。5月16日より第8 期生151名が学習開始。この間, 調整員の交代, 新しい先生の参加があった。	天 理 教 千葉県	佐藤 和美※, ティアン 佐久間正一, 清水 宏 黒木 啓子
クrontイ・スラム (バンコク市内の スラム)	電気工養成所 スラム住民のための職業訓練。 電気工研修所 養成所終了者による電気修理。現在常駐技術者2名。 奨学金援助 プラティーブ財団を通じた58名の他, 今月面接調 査を終えた17名全員に奨学金を給付することにな った。1983年度分は82名となる。 図書館 開館時間は従来通り午前9時半から午後5時半ま でだが, 職員2名の勤務日割の変更により, 経費 を若干削減した。	一般寄付 モラロジー研究所 神奈川県 A C T J O F I C 庭野平和財団	福村 州馬※, 釘村千夜子 イム, スアントビー サムルアイ

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
御所 (奈良県)	日本語学校 一時滞在ベトナム難民の日本定住援助。(5p.参照)	U N H C R カリタス・ジャパン	平賀 増美※, 伊藤千鶴子 大貫 玲子
ソマリア (東アフリカ)	農業プロジェクト(準備中) マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。	U N H C R 一般寄付	柴田 久史
レバノン (中近東)	医療ボランティア派遣プロジェクト(準備中) ベイルートおよび南部レバノンでの、被災民(レバノン人とパレスチナ人)に対する医療活動の援助。	一般寄付	竹内 俊之
活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京事務所 (本部)	渉外, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, T/E 発行	全 社 協 Y M C A 妙 心 寺 一 般 寄 付	星野 昌子(代表), 熊岡 路矢(事務局長), 田島 誠, 荻野美智子, 本橋 栄, 鶴田 三芳 他約 20 名
バンコク事務所	渉外, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報		高塚政生(バンコク事務局長) 深津 高子, 武田 恵治 ボンビモン, カモン 森本喜久男, 伊藤真理子 エディサ, 小池 清治 他約 10 名
京都連絡事務所	渉外, ボランティア調整, 募金, 会計, 情報収集及び広報	支 持 会 費 バザー売上	永井 聖子(京都事務局長) 他約 7 名



援助の輪をもう少し大きく① 上げよう

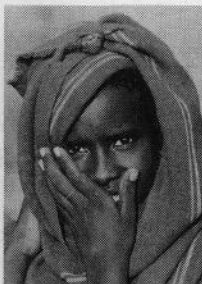
今年 JVC は新たに、中東、アフリカへ援助の輪を広げることになりました。'80年の設立以来 JVC は、インドシナ難民の救援活動を行ってきたわけですが、タイの場合は日本から地理的にも近く、同じアジアの地域であることから、現地へ入るのも比較的容易であったと言えます。タイでのボランティア活動に参加する際には渡航費、生活費などは自己負担でスタートしました。

しかし中東、アフリカでは、かなり事情が異なります。ともに遠隔地であり、ソマリアでは衣食住の確保、移動、通信にも不便なところです。レバノンではとりわけ安全の確保が必要であり、物価も高いことから出費も増えざるを得ません。ボランティアの個人負担にも限界があります。

まだプロジェクト運営のために必要な資金が確保できず難航しています。このような事情をご理解いただき、ご支援いただけますようお願い致します。(ご送金の際は、それぞれ《アフリカ募金》《レバノン募金》と指定の上、郵便振替にてお願い致します。)

ソマリア

マガネイ・キャンプ(ゲド地区)における、エチオピアからの難民約800人を対象とする。定住自立のための農業プロジェクト。農業技術者、調整員を派遣するため2年間に2千万円が必要です。8月より活動開始予定。



レバノン

ベイルート、南部レバノンの被災民を対象とする医療活動。現地の民間団体に医師、看護婦、助産婦、および調整員を派遣するために1年間に9百万円が必要です。調整員は7月末現地入り、続けて看護婦が出発します。



ソマリアだより

柴田 久史

農業プロジェクトの準備のため、3月からソマリアに滞在している柴田君は、大和の定住センターで働いていたこともあり、日本に定住しているカンボジア人、ラオス人たちと実際に深くつき合ってきた経験の持ち主です。その彼から、現在東京近郊の定住者に日本語を教えている「日本語家庭教師」のグループの人達にこんな手紙が届きました。(編集部)

私は一部の人から『私達は難民に関わった経験もないし、海外での経験もないし……』などと不安げな言葉を聞いたことがあります。私自身も技術はないし、英語はへたくそだしなどと悩んでおりました。(今もそうです。)ただ今回自信を持ったこと、そして今まで何となく感じていた疑問が明らかになったことを述べたいと思います。定住センター、医療チームで働いたことを通して、私は何十年もボランティアの経験のある人、めっちゃうちゃりっぱな技術を持っている人、そして5ヶ国語も6ヶ国語も話せる人に出会ってきました。

そしてこのソマリアでもそうです。が、彼らが難民問題、そしてプロジェクトを理解し、成功させているかという点必ずしもそうではないことがわかりました。同じ失敗をくり返し、今だにその原因をつかんでいない。経験をもってしても技術をもってしても、巨額な費用を投じてもだめなのです。

それはやはり、『彼らの視点に立って物が考えられない、彼らの気持ちを理解しようとしなからだ』と思います。この視点が欠けている限り致命的です。

みなさんが彼らとの接触を通し、この視点に立って考えることができれば、もうそれだけで充分難民問題はどこへ行ってもやっていけるのではないのでしょうか。技術、言葉は経験で克服できますが、この視点だけは本人が気づかない限り一生わからないままでしょう。この部分については、自分に対する問いかけ、確認のつもりで書いてみました。何か意見がありましたら、手紙を下さい。 3, June '83

Hisashi Shibata C/O UNHCR Post Box 2925
Mogadishu, SOMALIA

JVCの活動は、みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

●インドシナ難民救援募金（5月小計 332,370 円）

東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

●ボランティア募金（5月小計 24,000 円）

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

●クロントイ・スラム募金（5月小計 5,500 円）

バンコク、クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。

●デッグ・スラム奨学金（スラム児童奨学金）

バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助、一口いくらでも可。（5月小計 66,000 円）

●JVC 運営経費募金

事務経費、人件費、通信費等、JVC の仕事を進めて行く上で欠くことのできない資金が慢性的に赤字となっています。

●アフリカ難民救援募金（5月小計 70,000 円）

●レバノン難民救援募金（5月小計 9,500 円）

南部レバノンの難民キャンプに7月より、医師、看護婦、検査技師、身障者のための療法士などを派遣活動資金を募っています。

●日本語家庭教師募金（5月小計 2,500 円）

定住難民の家庭は遠い所が多く、交通費が負担となっています。また日本語教材費も必要です。

●医療募金（5月小計 25,000 円）

緊急医療活動のための資金となります。

郵便口座：東京 7-96238

加入者名：JVC 東京事務所医療募金係

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記
の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京 9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読
申し込みとは別に送金くださるようお願い
いたします。

JVC より

●「サバイディーバザー」雨天の中、大盛況！

場所は、JVC 東京事務所のある東京都杉並区、国電阿佐ヶ谷駅南口広場。

事務所に集まる学生・勤め人・主婦らを中心に、7月17日、日曜日、JVC の活動を地域の人に知ってもらい交流をはかろうという意図で企画、運営されました。

売りものは、おなじみになった、美型奇型とりまぜての手作りクッキー・新品中古衣料・日用品・書籍・ラオス手工芸品に加えて、日々草・観葉植物等の鉢、とりたてのきゅうり・じゃがいもなどの新鮮野菜と、一見マーケットの様相を呈しました。

“サバイディー”（ラオス語でごきげんよう）と気軽に、飛び入りボランティアもあらわれ、今までのどちらかと言えば収益中心のバザールから、より多くの人に参加してもらおうという幅広いものへと変化をしめた企画でした。（K）

●本誌の写真・文章・地図等の無断転載、複製を禁じます。

編集後記

●このところ、いくつかの雑誌に各国に散らばった最近のインドシナ難民の動向についてのルポが発表された。中央公論6月号の吉岡忍氏、文芸春秋6月号の前川誠氏、諸君8月号の殿岡昭郎氏のもの等でいずれも、反現政権のゲリラ活動や海外での支援組織、および彼らの主張が報告されている。

難民は本来政治的な存在であり、政治的な分析、議論は重要である。しかしまた難民問題は個人の人權の問題であり、日々の生活の問題である。多くの声に耳を傾けつつ、自らの方向性を見失わず援助活動を続けて行きたい。

そして吉岡氏や中央公論3月号の色摩力夫氏の記事にあるように、日本社会の問題として難民問題をとらえることを忘れてはならない。

ファイナー

裏表紙撮影 下 蘭 宏 司

ナムユン補助食供給センターにて

JVCとは

Japanese Volunteer Center は1980年2月、タイの首都バンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

またタイのみならず、カンボジア国内での井戸掘りを実施している他、日本国内でも定住希望者のための日本語教育を行っています。

東京事務所と京都連絡事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。



発行所 JVC東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南
 1-1-5 三笠ビル3F
最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03(316)3253

バンコク事務所 Japanese Volunteer Center
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

京都連絡事務所 〒602 京都市上京区寺町今出川角
 光月堂2F TEL075(256)1382
 〈海外ボランティア情報センター内〉

昭和58年7月20日発行

毎月20日発行

発行人 星野 昌子
編集人 本橋 栄
 森山久寿子

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円(1冊送付)

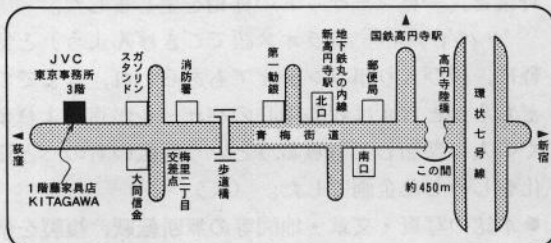
賛助購読者 1口 10,000円(4冊送付)

郵便口座番号 東京3-54186

加入者名 JVC東京事務所

住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。

Trial & Error は、季刊(年4回)の特集号と、年8回のニュースレターをお届けすることになりました。年間購読料は従来通りです。



定価 送料共 200円